

許し尺度の作成の試み

加 藤 司* 谷 口 弘 一**

許しとは“自身の感情を害することを知覚し、それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内のプロセス”である。本研究では、許しの個人差を測定する許し尺度を作成した。研究1では、先行研究などから、許し項目を作成し、691名の大学生によるデータを用い因子分析を行った結果、恨みと寛容の2因子が抽出された。192名の大学生のデータを用いた、4週間の間隔をあけた再検査法による信頼性係数は、許しの否定では0.72、許しの肯定では0.82であった。研究2では、331名の大学生を対象に、攻撃性、怒り、共感性、ビックファイブとの関連性を検討し、許し尺度の構成概念妥当性を検証した。さらに、研究3では、特定状況における許し単一項目と許し尺度との関連性が検証され、結果は仮説と一致していた。これらの結果から、許し尺度の妥当性が保証された。

キーワード：許し、許し尺度、復讐、怒り、攻撃性

許し (forgiveness) は宗教学や社会学で主に論じられてきたが (McCullough, Pargament, & Thoresen, 2000 ; McCullough & Witvliet, 2002), 1990 年後半に入り、心理学を含め実証主義的な領域において注目されるようになった (McCullough, 2000 ; Yamhure-Thompson, Snyder, Hoffman, Michael, Rasmussen, Billings, Heinze, Neufeld, Shorey, Roberts, & Roberts, 2005)。許しの研究が注目される背景には、主に問題を抱えた夫婦や犯罪犠牲者を対象に、許しに焦点をあてた臨床への応用の成果 (Baskin & Enright, 2004 ; Baumeister, Exline, & Sommer, 1998 ; Enright & Coyle, 1998 ; Gordon, Baucom, & Snyder, 2005 ; Hargrave & Sells, 1997), 許しが精神的な健康を導くという理論的根拠と実証研究がある (Harris & Thoresen, 2005 ; McCullough, 2000 ; McCullough & Witvliet, 2002 ; Toussaint & Webb, 2005 ; Worthington & Scherer, 2004)。この意味において、実証研究による許し研究の意義がある。本研究の目的は許し尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することである。

広辞苑第六版 (新村, 2008) では、許しは (1) ゆるすこと。許可。聴許。認可。 (2) 罪やあやまちをゆるすこと。赦免。 (3) 茶道・生花・琴曲などの芸道で、師匠か

ら弟子に与える免許、とある。一方、実証研究における一貫した許しの定義はないが (McCullough et al., 2000 ; Worthington, 2005 ; Worthington & Scherer, 2004 ; Yamhure-Thompson & Snyder, 2003), いくつかの観点から許しの定義について論議されている。

まず、許しは感情を害させたものに対する憎しみ、憤りなどの感情、認知、行動、動機づけの向社会的変化である、という点において、Enright ら (Enright & Coyle, 1998 ; Enright & Fitzgibbons, 2000 ; Enright, Freedman, & Rique, 1998), McCullough ら (McCullough et al., 2000 ; McCullough, Rachal, Sandage, Worthington, Brown, & Hight, 1998 ; McCullough, Worthington, & Rachal, 1997), Snyder ら (Yamhure-Thompson & Snyder, 2003 ; Yamhure-Thompson et al., 2005) など、多くの研究者が同意している。本研究でも、許しを変化として捉える立場をとる。

次に、許しを対人プロセスと捉える立場と個体内プロセスと捉える立場がある (Baumeister et al., 1998 ; Worthington, 2005)。Hargrave & Sells (1997) は前者の立場を、Enright ら、McCullough ら、Snyder らの研究グループは後者の立場をとっている。Hargrave & Sells (1997) は、許しは関係の再構築を認め、関係を改善するように話し合うようにすることであると定義している。一方、後者の立場をとる研究者たちは許しと和解を区別することを強調している。許しの研究、特に臨床現場においては、当事者間の関係に及ぼす許しの影響が重要なテーマとなる。しかし、許しが和解であるとする立場は許しとその結果とを混合し、許しが関係の変化に及ぼす影響を検証することができない。

* 東洋大学社会学部社会心理学科

** 同志社大学

Correspondence concerning this article should be addressed to Tsukasa Kato, Department of Social Psychology, Toyo University, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, Japan. Electronic mail may be sent via the Internet to "mtsukasa@hotmail.com" or "mtsukasa@toyonet.toyo.ac.jp"

また、犯罪犠牲者の研究では加害者が死亡している場合、許しが芽生えても加害者との和解はない。そこで、本研究では許しを個体内でのプロセスと捉える立場をとる。

また、多くの研究者たちが、法的な許可、感情を害させたものに正当な理由がある場合の納得、諦め、受容、感情を害させた出来事の忘却や否認などは許しではないと考えている (McCullough et al., 2000)。その一方で、多くの研究者が、許しの定義に、感情を害させたものに対する慈愛、同情、憐れみなどを含めている (Yamhure-Thompson & Snyder, 2003)。例えば、Enrightらの許しの定義には、許しに必要な構成要素として、感情を害させたものに対する慈悲が含まれている。このような定義の背景には、許しの研究が主に宗教学の領域で展開し、神による許しという思想があるからであろう。宗教学あるいは宗教心理学をその基盤としない心理学者である Snyder らの定義では、許しには慈愛や憐れみは必要ではないと明示している。許しから慈愛や憐れみへ移行する可能性はあるが、本研究では、許しには必ずしも慈愛や憐れみは必要ではないと考える。

以上のことをふまえ、本研究では許しを“自身の感情を害することを知覚し、それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内のプロセス”と定義する。

このように許しの概念を操作し得るように定義づけることで許しに関する実証研究が盛んになり、許しの個人差を測定する尺度が開発されるようになった。一方、我が国では、筆者の知る限り、許しに関する実証研究はみられず、許しに関する尺度開発もなされていない。海外で作成された尺度は本定義と必ずしも一致していないばかりではなく、宗教に関連する項目(例えば“許しは自分のスピリチュアリティのあらわれである”)など、日本人には理解しにくい項目もみられる。そこで、本研究では既存の尺度を翻訳するのではなく、我が国で使用する事が可能な許し尺度を作成する。

許しの尺度は、許しの対象と全般性によって分類することができる。許しの対象は感情を害させたもの、出来事あるいは状況、自己に分類できる (Yamhure-Thompson & Snyder, 2003)。許しの全般性は、感情を害した特定人物との特定の出来事に対する許しの程度を測定するもの、感情を害した特定人物とのさまざまな出来事に対する許しの程度を測定するもの、特性としての許しを測定するものに分類される (McCullough, 2000)。先にも述べたが、許しの実証研究の進展には、

許しに焦点をあてた臨床実践、精神的健康に及ぼす許しの影響がある。臨床実践では問題を抱えた配偶者あるいは加害者に対する許しが重要となる。精神的健康との関連性では、精神的健康に対する特性としての許しの予測力が高いことが知られている (Yamhure-Thompson et al., 2005)。これらのことから、本研究では、感情を害させたものに対する特性としての許しを測定する尺度を作成する。本研究では、状況や時間の経過とともに変化し得るという意味において許しを個人内プロセスと定義しているが、その中に観察される他者を許す傾向という安定性が存在することから、この許しの安定性を測定する。なお、本研究で記載している特性とはこのような安定性を意味する(プロセスと安定性との関係はコインの表裏であり、質問紙法によってプロセスを測定し得ることに関する議論は Lazarus (2000) や加藤 (2004) を参照)。

以上のことから、本研究では、感情を害させたものに対する特性としての許しを測定する許し尺度 (Forgiveness of Others Scale) を作成し、その信頼性と妥当性を検証する。

研究 1

目的

これまでに作成された許し尺度をもとに許し尺度を作成し、その項目分析および信頼性の検証を行う。

方法

調査参加者と手続き 2005年5月から同年7月、大学生を対象に質問紙調査を実施した。性別・年齢不明者などを除く有効回答者 691名 (男性 378名、女性 313名、平均年齢 19.63歳、範囲 18-32歳、標準偏差 1.74) を分析対象とした。そのうち 231名に対して、再検査法による信頼性を検証するため、4週間後再度同一の調査を実施した。有効回答者数は 192名 (男性 89名、女性 103名、平均年齢 19.09歳、標準偏差 1.21、範囲 18-24歳) であった。

質問紙 本研究で作成した質問項目 30項目を用いた¹。Enright Forgiveness Inventory (Subkoviak, Enright, Wu, Gassin, Freedman, Olson, & Sarinopoulos, 1995), Forgiveness Scale (Rye, Loiacono, Folck, Olszewski, Heim, & Madia, 2001), Heartland Forgiving Scale (Yamhure-Thompson & Snyder, 2003), Mullet, Barros, Frongia, Usai, Neto, & Shafighi (2003), Tendency to Forgive Scale (Brown, 2003), Transgression-Related Interpersonal Motivations Inventory (McCullough et

¹ 本項目の他、それぞれの項目に関して十分に理解できたかどうかに関する自由記述欄を設けた。

Table 1 許し尺度の因子パターン

	項目内容	F1	F2	<i>M</i>	<i>SD</i>
	F1: 恨み			12.49	6.80
25	私を傷つけた人は、ひどい目にあわせてやる	.78	.10	0.66	0.84
17	私をおとしめた人に仕返しをすることを考える	.78	.27	0.82	0.88
7	傷つけられたことを思い出すと、仕返しをしたくなる	.70	.07	1.11	0.95
21	私をおとしめた人を許すことはできない	.62	-.27	1.15	0.89
27	私を侮辱したら、その人のことをひどく思い続ける	.60	-.09	0.93	0.89
20	私をさげすんだ人は許しがたい	.56	-.22	1.11	0.86
6	私をおとしめた人のことを考えると、憎しみがわいてくる	.55	-.03	1.55	0.90
28	子供のころに、私を傷つけた人は許せない	.54	-.10	0.81	0.95
14	私をバカにした人は、将来、その報いを受けると思う	.53	.07	0.80	0.96
19	害がなくなっても、私は許すことができない	.48	-.19	0.59	0.78
30	私の大事な物を傷つけた人は許せない	.47	.08	1.81	0.91
10	相手が間違っているという、気持ちがおさまらない	.41	.05	1.15	0.85
	F2: 寛容さ			11.78	4.90
11	相手が許しを請えば、許してあげる	.10	.64	1.63	0.79
12	相手が謝れば、許してあげる	.09	.61	1.76	0.79
9	気分がよければ、平気で人を許すことができる	.14	.56	1.41	0.97
29	侮辱されても、やがて遠い過去のことだと思えることができる	-.08	.53	1.60	0.94
15	時間がたてば、私をバカにした人のことを理解できると思う	.03	.52	1.04	0.84
26	私を傷つけた人でも、やがて、いい人だと思えるようになる	-.05	.51	0.81	0.75
4	私をおとしめた人への怒りを、忘れることができる	-.07	.51	0.88	0.85
1	私には、心の底から、人を許すことができると思う	.04	.50	1.36	0.86
16	私を悪者にした人にも、良いことがあればいいと思う	-.02	.44	0.67	0.81
5	私に罪を負わせた人を、認めることができる	-.01	.44	0.62	0.74
	因子間相関		-.46		

注 すべての項目は逆転していない値を用いた。

al., 1998) の項目から、本定義に沿った項目を収集し、それらの項目を参考に、日本人に理解できるように作成した。項目作成に際して、感情を害させたものを許す項目 (13 項目) と、許せないとする項目 (17 項目) を作成した。許しに関する多くの尺度では許しの両面に関する項目が含まれている。例えば、Forgiveness Scale (Rye et al., 2001) では害させたものに対する否定的な思考・感情・行動のなさや肯定的な思考・感情・行動の現存の 2 因子を抽出している。Mullet et al. (2003) の研究においても、許す能力のなさや表した許しの阻害因子 (blockage to forgiveness) を抽出している (他の因子は許す能力に関する因子)。また、Heartland Forgiving Scale (Yamhure-Thompson & Snyder, 2003) では両側面に関する因子をあらかじめ仮定し、尺度項目が作成されている。

項目作成の後、日本語を母国語とする大学生 5 名と個別に面接を行い、回答のしやすさ、日本語としての表現、定義との対応関係などを話し合い、修正を加えた。それぞれの項目は“あてはまらない”、“少しあてはまる”、“あてはまる”、“よくあてはまる”の 4 件法で評定させ、項目の得点は 0 - 3 点とした。得点が高

いほど許し傾向が高いとした。

結果と考察

まず、項目の偏向状況を算出し、60%以上の調査参加者が“あてはまらない”と回答した 2 項目を削除した。次に、相関行列の対角に 1 を代入した因子分析を行った結果、固有値の減退状況は 6.40, 2.72, 1.83, 1.53……であった。因子の解釈のしやすさなどから 2 因子構造を仮定した因子分析 (反復主因子法, promax 回転) を行い、因子負荷量が 0.40 未満の 6 項目を削除した結果が Table 1 である²。第一因子は“私を傷つけた人は、ひどい目にあわせてやる”などの項目に高い負荷を示し (12 項目)、恨みと命名した。第二因子は“相手が許しを請えば、許してあげる”などの項目に高い負荷を示し (10 項目)、寛容さと命名した。両因子は仮定した許しの 2 つの側面と一致していた。この 22 項目をもって許し尺度 (Forgiveness of Others Scale) とした。因子間相関は $r = -.46$ 、内的整合性は $\alpha = .87$ 、 $\alpha = .79$ であり、それぞれの下位尺度において、有意な性差はみられなかった。なお、本尺度と同様の下位因子を有する For-

² Olsson (1979)、繁樹 (1990) を参考に、多分相関係数を用いて因子分析を行ったが同様の結果が得られた。

givenness Scale (Rye et al., 2001) の因子間相関は $r(327) = -.41$ であり、本結果と近似していた。また、Forgiveness Scale (Rye et al., 2001) の下位尺度も、有意な性差はみられていない。これらの結果から本結果が妥当であったと考えられる。4 週間の間隔をあけた再検査法の結果、恨み因子は $r = .76$ 、寛容さ因子は $r = .82$ であった。他の研究と比較してもほぼ十分な値であると考えられる。

研究 2

目的

許し尺度の構成概念妥当性を検証する。基準変数として怒り、攻撃性、共感性、ビッグファイブの指標を用いる。怒りと攻撃性は否定的な感情や行動であり、許しとは負の関連性が予測される。実際、許しと怒りや攻撃性との間には有意な負の相関が報告されている (Berry, Worthington, Parrott, O'Connor, & Wade, 2001; Rye et al., 2001; Yamhure-Thompson et al., 2005 など)。許しの程度が低いことは、必ずしも、怒りや攻撃性に結びつくとは限らないが、許せないという感情や認知は怒りや攻撃性と直接関連しているため、怒りや攻撃性は寛容さ因子より、恨み因子との関係が強いと予測される。Forgiveness Scale (Rye et al., 2001) を用いた研究では、怒りとの相関関係において、寛容さ因子に対応する因子より ($r(327) = -.21$)、恨み因子に対応する因子との相関係数の絶対値 ($r(327) = .34$) の方が高いと報告している (Rye et al., 2001)。共感性とは他者を理解し、他者の立場に立つことのできる能力を意味する (Batson, 1991)。Enright らは 4 段階の許しのプロセスを仮定し、感情を害させたものへの共感が許しのプロセスにおいて重要な要素であると仮定している。実際、共感性と許しとの間に有意な正の関連性が報告されている (Macaskill, Maltby, & Day, 2002; Paleari, Regalia, & Fincham, 2005 など)。このことから、許しと共感性には正の関連性が予測される。パーソナリティの基本的次元であるビッグファイブのうち、理論的に、許しは調和性、神経質傾向と関連している (McCullough & Hoyt, 2002)。実際、調和性と許しとの間に正の関連性が、神経質傾向と許しとの間に負の関連性が報告されている (Berry et al., 2001; McCullough & Hoyt, 2002 など)。すなわち、許しと調和性との間には正の相関、神経質傾向との間には負の相関が予測される。

方法

調査参加者と手続き 2005 年 5 月、大学生を対象に質問紙調査を実施した。有効回答者 331 名 (男性 144 名、

女性 187 名、平均年齢 19.08 歳、範囲 18-25 歳、標準偏差 1.22) を分析対象とした。

質問紙 以下の尺度から構成されていた。“あてはまらない” から “よくあてはまる” の 4 件法で評定させ、項目得点は 0 - 3 点とし、得点が高いほどそれぞれの特性が高いとした。ただし、ビッグファイブ尺度のみ 5 件法によって評定させ、項目の得点は 1 - 5 点とした。

1. 許し：研究 1 で作成した 30 項目を用いた。研究 1 と同様の手続きによって因子分析を行った結果、同一の 2 因子が抽出され、同一項目が .40 以上の負荷を示したため、研究 1 と同様の 22 項目を分析に用いた。本研究の内的整合性は恨みで .89、寛容さで .79 であった。
2. 攻撃性：安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 (1999) の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙を用いた³。本尺度は Buss & Perry (1992) と Buss & Durkee (1957) の攻撃性尺度をもとに作成したものであり、身体的攻撃 (「なぐられたら、なぐり返すと思う」など 6 項目)、短気 (「いらいらしていると、すぐに顔に出る」など 5 項目)、敵意 (「人とよく意見が対立する」など 6 項目)、言語的攻撃 (「自分の権利は遠慮しないで主張する」など 5 項目) の 4 つの下位尺度を有する。本尺度の信頼性と妥当性は安藤他 (1999) によって検証されている。本尺度の内的整合性は順に $\alpha = .73, .82, .79, .79$ であった。
3. 怒り：怒りの測定では State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI: Spielberger, Johnson, Russell, Crane, Jacobs, & Worden, 1985) の Trait Anger Scale (10 項目) と、渡辺・小玉 (2001) の怒り尺度を用いた。STAXI の信頼性と妥当性は検証されており (Spielberger et al., 1985)、鈴木・春木 (1994) による邦訳を用いた。本尺度の内的整合性は $\alpha = .78$ であった。渡辺・小玉 (2001) の怒り尺度は怒り感情の喚起のしやすさ、持続のしやすさを測定するために開発され、喚起 (「私を怒らせるのは簡単だと思う」など 6 項目) と持続 (「失礼なことをされた日は一日中気分が悪い」など 7 項目) の 2 つの下位尺度を有する。渡辺・小玉 (2001) によって信頼性と妥当性が検証されている。本尺度の内的整合性は順に $\alpha = .82, .78$ であった。
4. 共感性：加藤・高木 (1980) の情動的共感性尺度を用いた。本尺度は Mehrabian & Epstein (1972) の情動的共感尺度に基づき作成されたもので、感情的暖

³ 本尺度の項目に日本語として誤りがみられたため、正しい表記に修正した。

かさ(「私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる」など10項目)、感情的冷淡さ(「私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる」など10項目)、感情的被影響性(「まわりの人が神経質になると、私も神経質になる」など5項目)の3つの下位尺度からなる。本尺度の信頼性は加藤・高木(1980)によって、妥当性は桜井(1988)らによって確認されている。本研究の内的整合性は順に $\alpha=.79, .78, .60$ であった。

5. ビッグファイブ: 和田(1996)のビッグファイブ尺度を用いた。本尺度は Adjective Check List によってビッグファイブを測定するものであり、外向性(E)、神経質傾向(N)、経験への開放(O)、誠実性(C)、調和性(A)の5つの下位尺度(それぞれ12項目)からなる。本尺度は信頼性と妥当性が確認されている(和田, 1996)。本研究の内的整合性は順に $\alpha=.90, .92, .88, .85, .83$ であった。

結果と考察

許し尺度の下位尺度と基準変数との間の積率相関係数を Table 2 に示した。攻撃性との関連性では身体的攻撃得点(恨み因子: $r=.46, p<.001$; 寛容さ因子: $r=-.21, p<.001$)、短気得点($r=.45, p<.001$; $r=-.22, p<.001$)、敵意得点($r=.33, p<.001$; $r=-.20, p<.001$)との間に有意な相関がみられた。また、攻撃性得点と寛容さ得点との間の相関係数と、攻撃性得点と恨み得点との間の相関係数との間に異なりがみられるかどうか、相関係数の同等性検定を行った結果⁴、寛容さ得点より恨み得点との間の相関係数の絶対値が高く、予測と一致していた。しかし、言語的攻撃得点に関しては、たとえ有意であってもその絶対値は低く($r=.13, p<.05$; $r=-.10, n.s.$)、予

測に反していた。本研究と同様の攻撃性尺度(Buss & Perry, 1992)を用いた Berry et al. (2001)の研究でも、言語的攻撃との間の相関係数は有意ではなく、その値は $-.12$ から $-.15$ であり本結果と近似していた。このことから、本結果は妥当であると考えられる。また、本研究のデータを用いた分析では、言語的攻撃得点を除く他の攻撃性得点と怒り得点(STAXI および渡辺・小玉(2001)の下位尺度得点)との間には有意な中程度から高い相関がみられているにもかかわらず、言語的攻撃性得点と怒り得点の間には有意な相関はみられなかった。言語的攻撃の項目は“自分の権利は遠慮しないで主張する”や“友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う”というように、怒りや攻撃性を示す項目というより、自己主張を示す項目と推測される。自己主張は否定的な感情や行動と結びつかず、そのため、言語的攻撃得点と許しとの間に有意な関連性がみられなかった、と考えられる。

怒りとの関連性に関しては、有意な中程度の相関がみられた($r=.53$ から $.59, p<.001$; $r=-.25$ から $-.44, p<.001$)。また、怒り得点と寛容さ得点との間の相関係数と、怒り得点と恨み得点との間の相関係数との間に異なりがみられるかどうか、相関係数の同等性検定を行った結果、寛容さ得点より恨み得点との間の相関係数の絶対値は高く、予測と一致していた。

共感性に関しては感情的暖かさ得点($r=-.18, p<.01$; $r=.34, p<.001$)、感情的冷淡さ得点($r=-.39, p<.001$; $r=.20, p<.001$)との間に有意な相関がみられた。結果は予測と一致していた。感情的被影響性得点との間には有意な相関はみられず($r=-.08$; $r=.03$)、予測に反していた。許しと共感との共通点は向社会性、他者に対する配慮、他者の視点に立つことである(McCullough, 2000)。許しには他者の感情や行動に左右されるという要素はない。そのため、許し得点と感情的被影響性得点との間に有意な関連性がみられなかったのであろう。

ビッグファイブに関しては神経質傾向得点との間に有意な相関($r=.22, p<.001$; $r=-.27, p<.001$)、調和性得点との間に有意な相関がみられた($r=-.23, p<.001$; $r=.28, p<.001$)。結果は予測と一致していたが、相関係数の値は低かった。Berry et al. (2001)の研究では、神経質傾向得点との相関係数は $-.27$ から $-.32$ 、調和性得点との相関係数は $.25$ から $.33$ であり、その値は本結果とほぼ近似していた。

本結果はおおむね予測と一致しており、本尺度の構

Table 2 許し尺度の妥当性の検証

基準変数	恨み	寛容さ	α
攻撃性			
身体的攻撃	.46***	-.21***	.73
短気	.45***	-.22***	.82
敵意	.33***	-.20***	.79
言語的攻撃	.13*	-.10	.79
怒り			
STAXI	.59***	-.25***	.78
喚起	.53***	-.39***	.82
持続	.54***	-.44***	.78
共感性			
感情的暖かさ	-.18**	.34***	.79
感情的冷淡さ	-.39***	.20***	.78
感情的被影響性	-.08	.03	.60
ビッグファイブ			
神経質傾向	.22***	-.27***	.92
調和性	-.23***	.28***	.83

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

⁴ 相関係数の同質性検定では Williams (1959) に基づき検定量を算出した。

成概念妥当性が検証されたと考えられる。

研究 3

目的

研究2では、実際の行動指標を基準変数とした妥当性を検証したものではないが、客観的に許しの行動指標を測定することは容易ではない。一方、特定状況に対する単一項目に対する回答は、質問紙尺度より実際の認知や行動を十分反映していることが知られている (Abdel-Khalek, 2006)。そこで、研究3では、本研究で作成した許し尺度と、特定状況に対する単一項目への回答との関連性を検証することで、許し尺度の妥当性を検討する。

加えて、序論で説明したように、許しの個人内プロセスにおいてある種の安定性がみられるとしたならば、特定状況における許しと、全般的な許し傾向を測定した許し尺度との間に有意な正の相関が予測される。

序論で定義したように、許しは感情が害されたことを知覚することが前提となる。研究3では、実験参加者が感情を害されたと感じる状況と、そのように感じるものが困難である状況进行操作し、それぞれの状況における許し単一項目と、全般的な許し傾向を測定する許し尺度との関連性を検証する。感情が害される状況では許し単一項目と許し傾向との間には正の相関がみられ、感情が害されない状況ではそのような関連性はみられない、と予測される。

方法

参加者と手続き 2006年6月、大学生を対象に研究1で作成した許し尺度22項目の質問紙調査を実施した。その約1ヶ月から2ヶ月後、この質問紙に回答した参加者を対象に、準実験を実施した。準実験では4名を1組とし、スタンフォード監獄実験の映像刺激を呈示し、その直後別室で個別の面接を実施した。刺激の呈示直前に、“心理学実験の映像を流すが、もし、あなたが〇〇役の被験者だとしたら、どのように感じるか、(映像刺激での)被験者の立場から映像を見るように”教示した。実験参加者を立場(看守か囚人)によって2群に分け、看守群は感情を害する可能性が低い状況、囚人群は感情を害する可能性が高い状況とした。実験計画を知らない2名の学生によって実験が実施され、その状況はモニターを通じて別室で第一筆者によって管理された。看守群の有効回答者数は55名(男性34名、女性21名、平均年齢20.40歳、標準偏差1.90、範囲18-24歳)、囚人群の有効回答者数は49名(男性26名、女性23名、平均年齢20.18歳、標準偏差2.06、範囲18-29歳)であった。心理学領

域を専攻としない大学生から実験参加者を募集したが、看守群に割り振られた実験参加者のうち5名が、囚人群に割り振られた実験参加者のうち11名が、スタンフォード監獄実験についての知識があったため、分析から除外した。

材料

1. 事前質問紙：研究1で作成した許し尺度22項目を用いた。本研究の内的整合性は恨み因子で.88、寛容さ因子で.83であった。

2. 映像刺激：1971年に実施されたZimbardoのスタンフォード監獄実験の様子を、実際の記録映像を交え某テレビ局が放送した映像と解説を第一筆者が編集したものを用いた。映像刺激では、囚人は実験を中止したかったが止められなかったこと、看守は実験が中断した後も実験の再開を求めたことなどが解説されていた。映像刺激は約20分であった。

3. 面接の質問内容：“あなたが〇〇役の被験者だとしたら、実験の首謀者であるZimbardoを許すことができますか”という問いに対して、“絶対に許せない”を10点、“問題なく許すことができる”を0点とし、0から10の数値を回答させた(許し単一項目)。また、映像刺激のマニピュレーションチェックのため“あなたが〇〇役の被験者だとしたら、この実験によって感情を害すると思いますか”という問いに対して、“とても感情を害される”を10点、“感情を害されるようなことは全くない”を0点とし、0から10の数値を回答させた(感情損傷項目)。その後、スタンフォード監獄実験に関する知識の有無などについて尋ねた。面接は5分から10分程度であった。

結果と考察

分析に先立ち、映像刺激のマニピュレーションチェックのため、感情損傷項目得点の平均値を用い、看守群と囚人群との間で t 検定を行った結果、有意な差がみられた($t(102)=14.97, p<.001$)。囚人群の平均値(8.45)の方が看守群の平均値(3.51)より高く、看守群より囚人群の方が感情を害する可能性が高いことが示され、実験目的に沿った映像刺激が呈示されたと考えられる。また、看守群と囚人群との許し尺度の平均値を比較するために t 検定を行った結果、有意な差はみられなかった(恨み得点 $t(102)=0.52, n.s.$ 、寛容さ得点($t(102)=0.69, n.s.$)。すなわち、看守群と囚人群では、実験前には許す傾向に有意な差はなく、両群の等質性が保障された。

事前調査による許し尺度の下位尺度得点と面接での許し単一項目との関連性を検証するために、それぞれ

の群における相関係数を算出した。その結果、看守群では恨み得点 ($r(53) = .01, n.s.$), 寛容さ得点 ($r(47) = .17, n.s.$) ともに有意な相関はみられなかった。一方、囚人群では恨み ($r(47) = -.39, p < .01$), 寛容さ ($r(47) = .46, p < .001$) ともに有意な相関がみられた。この結果は仮説と一致していた。すなわち、感情を害する状況に置かれた参加者では、一般的な許し傾向と状況限定的な許し傾向との間に有意な相関がみられたが、感情を害さない状況に置かれた参加者では、両変数間に有意な相関はみられなかった。これらのことから、本尺度で作成した許し尺度は、特定状況における許す行為と関連があることが明らかになった。

総合的考察

本研究の目的は許し尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することであった。まず、許しを“自身の感情を害することを知覚し、それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内のプロセス”と定義し、許し尺度を作成した。因子分析の結果、許し尺度は仮定した恨み、寛容さの2つの下位尺度を抽出することができた。また、許し尺度の構成概念妥当性を検証するために、攻撃性、怒り、共感性、ビッグファイブとの関連性を検証した。その結果、予測とほぼ一致した結果が得られた。また、特定状況下における許し単一項目との関連性を検証した結果、予測と一致した結果が得られた。これらのことから、許し尺度は信頼性と妥当性が検証された尺度であると考えられる。

我が国における許し尺度の開発は、さらなる許し研究の進展につながる可能性がある。先に述べたが、北米では問題を抱えた夫婦や犯罪犠牲者に対して、許しに焦点をあてた臨床実践とその効果測定がなされている (Baskin & Enright, 2004; Baumeister et al., 1998; Enright & Coyle, 1998; Gordon et al., 2005; Hargrave & Sells, 1997)。例えば、夫婦問題では配偶者を許し合える状態に至るプロセスが検討されたり、加害者を許すことによって犠牲者の精神的な重荷を軽減させる試みもなされている。また、明確なプロセスの解明は十分ではないが、許しが個人の精神的健康に寄与しているという報告もなされている (Harris & Thoresen, 2005; McCullough, 2000; McCullough & Witvliet, 2002; Toussaint & Webb, 2005; Worthington & Scherer, 2004)。さらに、許しは感情を害させたものに対する自己の行動制御に関する決定機能を有することから (Enright & Fitzgibbons, 2000; Worthington & Scherer, 2004)、許しは怒りや怨みなどのネガティ

ブな感情が攻撃性や復讐といった反社会的な行動へ移行することの予防に役立つと考えられる。本研究で作成した許し尺度は、我が国において、このような分野での研究の進展に役立つと考えられる。

引用文献

- Abdel-Khalek, A. M. (2006). Measuring happiness with a single-item scale. *Social Behavior and Personality*, **34**, 139-150.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392. (Ando, A., Soga, S., Yamasaki, K., Shimai, S., Shimada, S., Utsuki, N., Oashi, O., & Sakai, A. (1999). Development of the Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire. *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 384-392.)
- Baskin, T. W., & Enright, R. D. (2004). Intervention studies on forgiveness: A meta-analysis. *Journal of Counseling and Development*, **82**, 79-90.
- Batson, C. D. (1991). *The altruism question*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Baumeister, R. F., Exline, J. J., & Sommer, K. L. (1998). The victim role, grudge theory, and two dimension of forgiveness. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Dimensions of forgiveness: Psychological research and theological perspectives* (pp. 79-104). Radnor, PA: Templeton Foundation Press.
- Berry, J. W., Worthington, E. L., Jr., Parrott, L., II, O'Connor, L. E., & Wade, N. G. (2001). Dispositional forgivingness: Development and construct validity of the Transgression Narrative Test of Forgivingness (TNTF). *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1277-1290.
- Brown, R. P. (2003). Measuring individual differences in the tendency to forgive: Construct validity and links with depression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 759-771.
- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343-349.

- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 452-459.
- Enright, R. D., & Coyle, C. T. (1998). Researching the process model of forgiveness within psychological interventions. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Dimensions of forgiveness : Psychological research and theological perspectives* (pp. 139-161). Radnor, PA : Templeton Foundation Press.
- Enright, R. D., & Fitzgibbons, R. P. (2000). *Helping clients forgive : An empirical guide for resolving anger and restoring hope*. Washington, DC : American Psychological Association.
- Enright, R. D., Freedman, S., & Rique, J. (1998). The psychology of interpersonal forgiveness. In R. D. Enright & J. North (Eds.), *Exploring forgiveness* (pp. 46-62). Madison, WI : The University of Wisconsin Press.
- Gordon, K. C., Baucom, D. H., & Snyder, D. K. (2005). Forgiveness in couples : Divorce, infidelity, and couple therapy. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness* (pp. 407-421). New York : Taylor & Francis Group.
- Hargrave, T. D., & Sells, J. N. (1997). The development of a forgiveness scale. *Journal of Marital and Family Therapy*, **23**, 41-62.
- Harris, A. H. S., & Thoresen, C. E. (2005). Forgiveness, unforgiveness, health, and disease. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness* (pp. 321-333). New York : Taylor & Francis Group.
- Lazarus, R. S. (2000). Toward better research on stress and coping. *American Psychologist*, **55**, 665-673.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 加藤 司 (2004). 自己報告式によるコーピング測定の方法論的問題 心理学評論, **47**, 225-240. (Kato, T. (2004). A review of methodological issues for self-report measures of coping behavior. *Japanese Psychological Review*, **47**, 225-240.)
- Macaskill, A., Maltby, J., & Day, L. (2002). Forgiveness of self and others and emotional empathy. *Journal of Social Psychology*, **142**, 663-665.
- McCullough, M. E. (2000). Forgiveness as human strength : Theory, measurement, and links to well-being. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **19**, 43-55.
- McCullough, M. E., & Hoyt, W. T. (2002). Transgression-related motivational dispositions : Personality substrates of forgiveness and their links to the Big Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 1556-1573.
- McCullough, M. E., Pargament, K. I., & Thoresen, C. E. (2000). The psychology of forgiveness : History, conceptual issues, and overview. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness : Theory, research, and practice* (pp. 1-14). New York : Guilford Press.
- McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L., Jr., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1998). Interpersonal forgiving in close relationships : II. Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1586-1603.
- McCullough, M. E., & Witvliet, C. V. O. (2002). The psychology of forgiveness. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of positive psychology* (pp. 446-458). New York : Oxford University Press.
- McCullough, M. E., Worthington, E. L., Jr., & Rachal, K. C. (1997). Interpersonal forgiving in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 321-336.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- Mullet, E., Barros, J., Frongia, L., Usai, V., Neto, F., & Shafighi, S. R. (2003). Religious involvement and the forgiving personality. *Journal of Personality*, **71**, 1-19.
- Olsson, U. (1979). Maximum likelihood estimation of the polychoric correlation coefficient. *Psychometrika*, **44**, 443-460.
- Paleari, F. G., Regalia, C., & Fincham, F. (2005). Marital quality, forgiveness, empathy, and

- rumination : A longitudinal analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 368-378.
- Rye, M. S., Loiacono, D. M., Folck, C. D., Olszewski, B. T., Heim, T. A., & Madia, B. P. (2001). Evaluation of the psychometric properties of two forgiveness scales. *Current Psychology*, **20**, 260-277.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), **37**, 149-154.
- 新村 出 (編) (2008). 広辞苑第六版 岩波出版
- 繁梶算男 (1990). カテゴリーカルデータの因子分析 行動計量学, **34**, 41-51.
- Spielberger, C. D., Johnson, E. H., Russell, S. F., Crane, R. J., Jacobs, G. A., & Worden, T. J. (1985). The experience and expression of anger : Construction and validation of an anger expression scale. In M. A. Chesney & R. H. Rosenman (Eds.), *Anger and hostility in cardiovascular and behavioral disorders* (pp. 5-30). Washington, DC : Hemisphere.
- 鈴木 平・春木 豊 (1994). 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13. (Suzuki, T., & Haruki, Y. (1994). The relationship between anger and circulatory disease. *Japanese Journal of Health Psychology*, **7**, 1-13.)
- Subkoviak, M. J., Enright, R. D., Wu, C., Gassin, E. A., Freedman, S., Olson, L. M., & Sarinopoulos, I. (1995). Measuring interpersonal forgiveness in late adolescence and middle adulthood. *Journal of Adolescence*, **18**, 641-655.
- Toussaint, L., & Webb, J. R. (2005). Theoretical and empirical connections between forgiveness, mental health, and well-being. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness* (pp. 349-362). New York : Taylor & Francis Group.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67. (Wada, S. (1996). Construction of the Big Five Scales of personality trait terms and concurrent validity with NPI. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 61-67.)
- 渡辺俊太郎・小玉正博 (2001). 怒り感情の喚起・持続傾向の測定—新しい怒り感情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, **14**, 32-39. (Watanabe, S., & Kodama, M. (2001). Assessment of anger arousal and anger lengthiness. *Japanese Journal of Health Psychology*, **14**, 32-39.)
- Williams, E. J. (1959). Significance of difference between two non-independent correlation coefficients. *Biometrics*, **15**, 135-136.
- Worthington, E. L., Jr. (2005). More questions about forgiveness : Research agenda for 2005-2015. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Handbook of forgiveness* (pp. 557-573). New York : Taylor & Francis Group.
- Worthington, E. L., Jr., & Scherer, M. (2004). Forgiveness is an emotion-focused coping strategy that can reduce health risks and promote health resilience : Theory, review, and hypotheses. *Psychology and Health*, **19**, 385-405.
- Yamhure-Thompson, L., & Snyder, C. R. (2003). Measuring forgiveness. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment : A handbook of models and measures* (pp. 301-312). Washington, DC : American Psychological Association.
- Yamhure-Thompson, L., Snyder, C. R., Hoffman, L., Michael, S. T., Rasmussen, H. N., Billings, L. S., Heinze, L., Neufeld, J. E., Shorey, H. S., Roberts, J. C., & Roberts, D. E. (2005). Dispositional forgiveness of self, others, and situations. *Journal of Personality*, **73**, 313-359. (2007.10.4 受稿, '08.11.15 受理)

Development of the Forgiveness of Others Scale

TSUKASA KATO (TOYO UNIVERSITY) AND HIROKAZU TANIGUCHI (DOSHISHA UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2009, 57, 158–167

In the present article, “forgiveness” is defined as an intrapersonal process of change in one’s negative emotion, cognition, motivation, or behavior toward a perceived transgressor, from negative into neutral or positive. The Forgiveness of Others Scale (FOS) was developed in order to be able to assess individuals’ forgiveness in a variety of relationships across multiple interpersonal offenses. In Study 1, factor analysis of data from 691 undergraduates identified forgiveness and “unforgiveness” components of the Forgiveness of Others Scale. When the test was completed by 192 undergraduates, the test-retest reliability coefficients ranged from .76 to .82, confirming the test’s reliability. In Study 2, concurrent validity of the Forgiveness of Others Scale was assessed with data from 331 respondents, comparing it to measures of aggression, trait anger, empathy, and Big Five. The results suggested that the Forgiveness of Others Scale had high validity. Study 3, which examined the relationship between the Forgiveness of Others Scale and a single-item measure of forgiveness, provided evidence for the validity of the Forgiveness of Others Scale.

Key Words : Forgiveness of Others Scale, test development, vengeance, anger, aggression